

BOOK REVIEW

人生のヒント
VOL.4



このコーナーでは、
毎回異なるブックナビゲーターに、
人生やライフプランを考える上での
ヒントとなる本をご紹介します。

REVIEW.2 室町無頼

垣根 涼介 著



[新潮社刊、2016年8月、
1,836円]

現代の格差社会より、何倍も
凄まじい応仁の乱前後の社会。
ここに2人の無頼と1人の少年
が登場する。

幕府から洛中の治安維持を任されているにもかかわらず、
その裏で土倉（金蔵）を襲う極道の頭目・骨川道賢と、牢人と
洛外の村落をまとめて、一揆を起こそうとしている蓮田兵衛
の謀叛の物語である。そして、この両者をつなく存在として
才蔵という少年がいる。

作品はエンターテインメントとして充分楽しめるが、内包さ
れているテーマは、万人が納得のいく人生を歩んでいるか、
という現代と二重写しにされた深甚なもの。『眠狂四郎無頼
控』（柴田錬三郎）以来、最も「無頼」の2文字がふさわしい
作品だ。



REVIEW.3 鬼才 五社英雄 の生涯

春日 太一 著

[文春新書、2016年8月、994円]

五社英雄の父は下町で用心棒稼業をしていたことがあり、五社のアウトロー気質は、これからきている
とされる。だが、それだけだったろうか。

たとえばオールド・ファンには懐かしい『三匹の侍』。確かに「三匹」は、飢えて、眼をギラつかせて、
事件の渦中に飛び込んでいったが、物語の骨子そのものが農民の水争いであったり、娘の身売りであったり
——しかも、それらは必ずしも解決されない——観終わって割り切れないものが残った。

何のバックボーンも持たず、権力にもかまってもらえない人々の話を、五社は高度経済成長期にぶつけ
てみせた。決してアウトローにはなれなかった、逆説的モラリスト、五社の真実がそこにはあったのでは
あるまいか。

ブックナビゲーター 書評家 縄田 一男



【なわた・かずお】1958年東京生まれ。大衆文学研
究会会長。中山義秀文学賞名誉顧問。朝日時代小説
大賞選考委員。『時代小説の読みどころ』で中村星湖
文学賞を、『捕物帳の系譜』で大衆文学研究賞を受賞。
日経時代小説時評は20年を超える名物コラム。

REVIEW.1 ずんずん！

山本 一カ 著



[中央公論新社刊、2016年7月、
1,728円]

ずんずん！——何と小気味の良い
響きだろう。これは、自分の仕事に
誇りと責任をもって歩いていく人た
ちの靴音である。

主人公は、8人のグラフィック・デザイナーを束ねるAD・実川
玉枝。彼女が、浜町の牛乳販売店「纏ミルク」で、ピン牛乳をぐいっ
と飲んで颯爽と職場へ向かう際の表現でもある。

玉枝は、とある事件をきっかけに、配達員たちが運んでいるの
は牛乳だけじゃない、と感動し、牛乳と新聞の宅配こそ日本の文
化であると信じ、世界に向かって日本の文化を紹介する広報活動
のコンペに勝利する。

纏ミルクは大企業ではない。だが、従業員の志はどこまでも高く、
決してブレない。その姿に私たちはいつの間にか元気ももらって
いるのだ。